

# 和装本と洋装本

## 一 書物部位名称考

教養教育 歌野 博

**要旨：**書物の表紙の裏の部分やさす「見返し」という用語は、これまで和装本、洋装本を問わず用いられてきた。書物の製本構造上、「見返し」を必要とするのは洋装本だけである。洋式製本の技術が導入され、定着した明治中期以前に「見返し」が用いられた形跡は見出せない。当時の文献に徴し「見返し」は洋装本の盛行とともに和装本に転用された用語であることを確認した。書物の部位名称に着目し、書物の構造との整合性を考察することにより、和装本、洋装本の違いを明らかにするとともに、その文化的意味について言及した。

**キーワード：**書誌学・見返し・表紙・背・のど・みぞ

書物の各部をあらわす呼称の違いを考察し、そここもる発想に着目すれば、おのずから東西の書物の本質的な違いに逢着する。

「のど」という呼称は、日本に固有のもので正確に対応する英語はない。あえて当てれば、‘gutter’, ‘joints’, ‘hinges’, ‘groove’あたりだが、いずれも「みぞ」(‘gutter’, ‘grooves’), 「接合」(‘joints’, ‘hinges’) を意味する。(‘hinges’ は「ちょうつがい」のことである)

洋装本において、「接合」(綴じ)を強固にしようとするると不可避的にできるのが「みぞ」である。

和装本の代表的装丁である袋とじ(線装本)は表裏二枚の表紙で本体をはさみ、縫い付けるのに対し、洋装本は一枚の表紙で包み、背の部分で固着される。カバー(表紙)と本体をつなぐのが見

返しである。洋装本にとって綴じの強度を決定的に左右するのが見返しである。和装本の見返しは綴じの強度に直接関わらない。表紙、見返しは本文料紙と一緒に縫い合わせられるにすぎない。<sup>(1)</sup>

洋装本は表紙と見返しと本文料紙を背の部分で束ねられるところから綴じの強度に深く関わってくる。見返し側の「みぞ」である‘hinges’は開閉の負担が集中し、いたみやすく、‘re-hinged’や‘hinges weak’などと特記されるように、書物の保存状態に直に関わる重要な部位である点、カバー側の「みぞ」‘joints’に匹敵する。‘joints’にもいたみの程度を示す定型の表現が用意されている。<sup>(2)</sup> ‘hinges’, ‘joints’ともに綴じの強度に関わる証左といえよう。

綴じ目側の余白を意味する「のど」は、その原

(1) 和紙の料紙素材としての優秀さと相まって、この点に和装本のしなやか勁さ、補修の簡易さが由来する。中野三敏氏がかつて和本のコピー禁止の取り扱いにつき疑問を呈されたことがある。「軽量で簡略な装丁で、しかも折れ曲りやねじれに抜群に強い性質を持った和紙の本は、コピーごときで簡単に傷むような、そんなヤワなものでない。コピーが一番傷みやすいのは、むしろ現在コピー禁止になっていない、明治以降の堅い装訂の活字本や雑誌類にきまっている。」(中野三敏『書誌学談義江戸の版本』, 岩波書店, 1999年)

(2) ジョン・カーター、横山千晶訳『西洋書誌学入門』(図書出版社, 1994; ビブリオフィル叢書)の“joints”の項によれば、欠陥の度合い(保存状態)を表すに、rubbed(擦りむけた), tender(脆い), weak(はずれそうな), cracked(隙間に入った), loose(がたがたの), defective(ひどく欠陥のある), gone(完全にはずれた)の七段階がある。

義において余白の意味より「束ねる」にウエイトがかかり、「束ねられる場」からその付近の余白を指すようになったと思われる。

余白だから本文が印刷された丁に限られるべきであるが、和装本では見返しや前付けまで「のど」と呼ばれるのは「束ねる」原義に由来しよう。また、洋装本では「のど」に‘gutter’（みぞ）を当てるのは「束ねられる場」としての「のど」の原義を踏まえた転用にすぎず<sup>(3)</sup>、従って見返しに限って有効であり、本文ページの余白なら‘inner margin’が適切と言える。

「のど」が本文ページの余白を意味しきれなかったのは、和装本が表紙、見返し、本文料紙のそれぞれが言わば平等に縫い付けられ、「みぞ」を必要としなかった事情に見合っている。

ところで、「のど」という呼称はなかなか含蓄深い。人間の発声器官を当てたのは、束ねられたテキストは「のど」が開かれ、作動することによって発声（テキストの開示）が導かれる、と言う見立ては秀逸と言える。

中国の書物は「のど」を「書脳」とする。発声器官か脳か、いずれが適切か一概には言えないが、洋装本の‘inner margin’とは似て非なるものである。

洋装本は閉じられており、和装本は開かれている。綴じるとは本来異質の素材を組み合わせる技術であるとするれば、和装本は綴じられていない。表紙が本文と連続的である以上、その素材も同質と見なされる。和装本の表紙は、渋を引いたり、模様を施したりするものの、せいぜい一枚の紙を裏張りして厚みを出す程度であり、表紙と本文の料紙が全く同一の、いわゆる本文共紙の本も存在する。

一方の洋装本は、中世期の装飾写本に見られるような、板を芯に皮や布で覆い、金属、宝石など

さまざまな材料で装飾を加えた表紙によって綴じられている。表紙と本文（本体）は素材や外見において別のものの印象がまざる。現行のハードカバーの洋装本もその伝統を受け継いでいる。表紙と本文（本体）は和装本のように連続的ではない。非連続である洋装本において初めて綴じは成立するというべきである。和装本は、綴じるといふより表紙を含めた本文料紙を束ねるに過ぎない。

書物の構造上、表紙とそれに続く本文とが連続しているか、非連続であるかの文化的意味作用を演繹すれば、和装本は初めからテキストとしてそこにあり、洋装本は表紙を開いて初めてテキストの世界に参入することができる、という一事である。西洋の書物はこの意味で一種秘教的な（esoteric）性格を帯びている。巻物（scroll）から冊子（codex）への転換に果たした初期キリスト教徒の貢献が想起されてよい。「書物中の書物」、聖書が冊子の第一号だったとすれば、西洋の書物の秘教性にキリスト教のはるかな影響を透かし見ても的外れではないと思われる。西洋世界で「書物」の図像学的意味が「聖なる知」（divine knowledge）であることとも無縁でない。（Gertrude Jobs “Dictionary of mythology, folklore, and symbols”, The Scarecrow Press, 1962）聖性は秘されるのが常である。

表紙は洋装本では‘cover’と呼ぶ。しかし「表紙」と‘cover’はだいぶ性格を異にする。‘cover’は文字通り本体を保護する機能がすべてといってよい。「表紙」は文字通り「表の紙」、すなわち本体のテキストを代表する、最初の紙葉である。したがって、和装本の表紙には、テキストの究極的要約とも言うべき題名が記される。ジェラルド・ジャネットの指摘を待つまでもなく、題名はテキストの一部を構成する「パラテキスト」にはかな

(3) 前掲『西洋書誌学入門』の「MARGINS 余白」の項には「本の見開きの中央に当たる内側の余白は時折（印刷工を除いて）、gutter（のど）と呼ばれることもある」とある。

らず<sup>(4)</sup>、題名に最も正統的な場所を提供するのが「表紙」である。

一方、‘cover’の方はテキストと非連続であるがゆえに題名が記されることは稀であり、記されるにしてもその「ひら」の部分ではなく「背」に止まる。手元の本で確認すると、「ひら」に題名があるのは、カーターの『西洋書誌学入門』、『書物の悲劇』（ラート＝ヴェーグ・イシュトヴァーン著、早稲田みか訳、筑摩書房、1995）、『グリーンベルクの銀河系』（M. マクルーハン、森常治訳、みすず書房、1999）、『書物について』（清水徹、岩波書店、2001）ぐらいで、大半は「背」のみである。背に記される題名はテキストの一部と言うより、製本作業上必要とされる印に過ぎない。（背に記される題名を‘binder’s title’と呼ぶのもその事情を物語る。）

歴史的にみれば、19世紀初頭あたりからの「印刷された——もちろん紙もしくは厚紙の上に——表紙」、つまりペーパーバックの出現で、‘cover’の「ひら」にも、書名、著者名等、同じ頃現れた「ジャケット」<sup>(5)</sup>に記されているパラテキストが印刷されるようになる。<sup>(6)</sup>

とはいえ、ペーパーバック以前の「古典主義の時代には、書物は文字表記のない革装の姿をしていて、タイトルの、そしてときには作者名の、概括的な指示だけが背表紙に記載されていた」<sup>(7)</sup>事情は現行のハードカバーの本に受け継がれている。

この事情は装丁（綴じ）の構造的な違いによ

ても確認することができる。洋装本は縫い付けられた数組の折り丁（gathering, section）—これが本体である—に見返しの紙をつなぎとして‘cover’を接着する。一方の和装本は表紙とそれに続く本文料紙（これが本体に当たるが、もとより表紙と本文料紙が連続的であるから、本体と呼ぶのは適切と言えない）ともども縫い付けられる。つまり表紙にも糸が通されるのである。これは大きな違いと言える。洋装本の‘cover’に糸は通らず、二つ折りの紙の半面が‘cover’の裏に貼りこまれ、折り目のわずかな糊代で本体と接着される。この二つ折りの紙が見返しとなる。張り込まれた半面が、いわゆる見返しの「効き紙」であり、もう半面を「遊び」と呼んでいる。

見返しが‘cover’と本体をつないでいる。しかもわずかな糊代の部分だけによって、かろうじて‘cover’と本体は接合されているのである。<sup>(8)</sup>

見返し用の紙は本文料紙より幾分厚めのものが使われるにせよ、たかだか2～3ミリ幅の糊代で本体と‘cover’を接着しようというのだから、綴じの強度はそれほど期待できるものではない。（見返しの遊びをやめて、本体末葉に‘cover’同様貼りこんで効き紙にすれば、少なくとも本体と見返し紙の密着度は増し、綴じの強度も増す、というのは素人考えで、密着度が増す分、見返しの折り目部分すなわち糊代部分に負担がしわ寄せられ、綴じの総体的な強度は落ちるのだろう）

そこで洋装本独特の工夫が編み出された。見返しを介して本体と接着される部分である‘cover’

(4) ジェラルド・ジャンネット、和泉涼一訳『スイユ』（水声社、2001）

(5) 『西洋書誌学入門』によると1832年のものが最も古いらしい。『西洋書誌学入門』では“dust-jacket”に「カバー」の訳が与えられていて紛らわしい。“cover”を「表紙」と訳したのだから、「ダストジャケット」の方が適切と思われる。

(6) (7) 同『スイユ』

(8) 「普通の出版の中身と表紙とは多く見返し紙との僅か一分位の糊しろと寒冷紗とで保って居るといっても過言ではない」（高橋秀三『実用製本技術読本』、製本社出版部、昭和11年）

また、背の様式によっては、例えば、本体の背と“cover”の背を密着させるタイトバックやフレキシブルバックもあるが、もっとも普通の様式はホローバックで“cover”の背と本体の背は密着されず、「ホロー」つまり中空となる。

の背の両端を糊代部分の方へたくし込むようにするのである。この工夫によって、カバーの背の両端に縦の「みぞ」ができ（これが‘joints’と呼ばれる）、その「みぞ」は裏側、すなわち見返し効き紙に筋状の突起を作り出す。突起ができれば必然的にそこに新たな「みぞ」が作り出される。その裏、つまり見返し側の糊代部分（「のど」と言ってもよい）に見られるこの「みぞ」を‘hinges’と呼ぶ。「ちょうつがい」を意味する‘hinges’が「みぞ」となることわけがここに了解される。正確には「ちょうつがい」の用をなすのが「みぞ」=糊代部分であり、そこでカバーと本体は開閉できるように接着される。

これに対して、和装本は表紙、本体が一緒に縫い付けられるわけだから、見返しを必要としない。和装本の見返しは、「表表紙の裏側。書名、著者名、発行者名、発行年などを記す」（『日本国語大辞典』）もので、表紙同様、テキストと連続的な関係にあることは明らかである。『日本古典籍書誌学辞典』によれば、「前表紙の裏。表紙は通常、色や文様のある紙または裂（きれ）に厚紙で裏打ちし、天地左右を中へ折り込んで作られているが、そのままでは見た目が悪いので、本文と同じ料紙などを裏から一枚貼り付けておく」とある。

この代表的な二つの定義に共通する疑問は、見返しを前表紙（表表紙）に限定していることである。洋装本の見返しが‘cover’と本体をつなぐものであり、前表紙、後表紙の区別なくその裏の紙を指すのに、なぜ和装本ではそうでないのだろう。一つの理由は後述する漢籍の「封面」の影響であるが、その前に一体見返しという用語はもともとあったものなのだろうかという疑問を提起してお

きたい。

和装本に洋装本のような見返しは必要ない。換言すれば、二つ折りの紙という意味での見返しは和装本には存在しない。『日本古典籍書誌学辞典』が言うように、表紙裏の見栄えを考慮して貼り付けられた一枚の紙であり、白紙であれば「表紙裏」、書名等が記されていれば「扉」、後表紙の裏であれば「奥付」と呼べばすんだはずで、洋装本のように特別の呼称をあえて必要とすることもなかったのではないか。『古事類苑』の「書籍」の項を見渡しても、「見返し」をさす語は『翁草』の「裱紙うら」、『嬉遊笑覧』も魁星印を捺す所、すなわち「見返し」を単に「表紙」ですまし、表紙裏を特に意識していない趣であり、したがって「見返し」という用語も見えない。

和装本の見返しは洋装本の影響によって、対応する部位につけられたものではないだろうか。洋装本の製本技術が導入されたとき、綴じの強度を大きく左右する重要な部分と言うことで、「見返し」と名づけられた。<sup>(9)</sup>それを和装本にも転用した、という事情ではないだろうか。『日本国語大辞典』の用例も『改正増補和英語林集成』（1886）が最も古く、さほど古くからあった語とも思われない。ヘボンの『改正増補和英語林集成』は、慶応三年（1867）の初版、明治五年（1872）の二版に次ぐ三版である。初版、二版に「見返し」は出ない。

管見の限り『改正増補和英語林集成』（1886）以前に「見返し」が出てくる例は見出せない。明治5年、太政官正院に置かれた印書局（明治8年大蔵省所属。旧大蔵省印刷局、現国立印刷局）が印刷技術の指導者として横浜在留の米国人ポイントン、製本教師に英領カナダ出身のパターソンを

(9) 感じとしては、この語は製本職人が仕上がりを吟味する際、まず表紙を見て、次に裏返して見るその部分、といった印象である。「縮取りを外すと、愈々本は出来上がるのだが、更に見返紙の處をあけて見返紙の小口の糊つきのカスレや糊汚れや、糊入れ忘れ等を検査する必要がある」（前掲『実用製本技術読本』）のくんだりがそれを示唆する。

相次いで雇用したのが、翌明治6年である。<sup>(10)</sup> わが国における洋式製本技術の本格的な導入はこの年に始まったといつてよい。それから10年余の試行錯誤を経て、ようやく軌道に乗り、技術的に定着した時期が「見返し」という用語の初出を必然的にしたものと仮定したい。

図書館関係の文献を遡っても、西村竹間著『図書館管理法』(明治25年、金港堂刊)を、当時図書館界の抜きん出た指導者であった帝國図書館長田中稲城が全面的に改訂増補した、わが国における図書館関係文献の嚆矢とも言うべき文部省編『図書館管理法 全』(明治33年、金港堂刊)の附録として掲げられている、日本文庫協会編「和漢圖書目録編纂規則」で「書名ハ表紙或ハ其裏面又ハ巻首ニ記セル表題ノ中最モ詳細ナモノヲ取り」とするように、「表紙の裏」であり、日本図書館協会編『図書館小識』(大正4年刊)中の「和漢圖書目録編纂概則」でようやく「見返し」が登場する。(「巻頭ニ書名無キモノハ題簽、見返又ハ扉等ニ記セル書名ノ中最モ適当ト認ムルモノヲ取ルベシ」とある)

目録規則のような規範的な文献だけに、その採否は当該用語の普及と定着が前提されるとすれば、明治二十年代あたりに定着を見る洋式製本の導入過程での試行錯誤から、「見返し」という用語が製本業界から図書館学の学術用語として認知されるには一定の時日を要した事情を物語るものだろう。

明治20年代あたりとぼかしたが、従来漠然と洋装本が和装本をしのぐ時期をそのあたりに見なしていた。近年、それを裏付ける調査が報告されている。牧野正久氏による「年報『大日本帝国内務省統計報告』中の出版統計の解析(下)—— 明

治・大正・昭和(戦前)期の分野別出版点数の推移」(日本出版学会・出版教育研究所共編『日本出版史料 — 制度・実態・人 —』2, 日本エディタースクール出版部, 1996.8)には、『国立国会図書館蔵書目録 明治期』から経済, 物理, 天文, 暦の4分類を取り上げ, 「明治期に和装本がいつまで全盛であったか?」を探った結果, 「和装本刊行が盛んだったのが明治十八年までであり, 活字印刷本は明治十年ごろから登場しはじめ, 和装本の減少に対応して明治二十年以後に書籍製作の主流となっている」とされた。

また, 大沼宜規「明治期における和装・洋装本の比率調査 — 帝國図書館蔵書を中心に —」(同『日本出版史料』8, 2003.)は, 同目録の全分類にわたって, 和装本, 洋装本の比率を明らかにしたもので, それによると洋装本が和装本をしのぐのは明治19年とされる。その年, 前年の56%から42%に, 翌明治20年は25%と和装本の比率は激減していることが, 具体的な点数とともに示されている。

明治19, 20年(1886, 1887)あたりに和装本, 洋装本の比率が逆転したことをもって, 洋式製本技術がようやく定着したとみなしてほぼ間違いのないと思われる。「見返し」という用語がヘボンの『改正増補和英語林集成』(1886)に採録された背景をなすものであろう。

「見返し」は英語では‘end paper’である。ところが、『改正増補和英語林集成』の「Mikaeshi ミカエシ」には“The title page of a book”とあり, まさしく「標題紙」, 「扉」である。(「Tobira トビラ 扉」の項も同様に“The title page of a book”と訳されている)

ヘボンのこの辞書がどの程度当時の言葉の意味

(10) 大蔵省印刷局編『大蔵省印刷局百年史』(大蔵省印刷局, 1971)

前掲『実用製本技術読本』によれば, 民間では既に明治3, 4年ごろから洋式製本業が始められていたらしい。和綴製本を業としていた数名の先駆者たちが, 洋装本を解体して研究, 研鑽を積み, 明治3, 4年ごろ洋式製本業を始めて「日本の製本術」の礎を築いた旨の記述が見える。



を正確に反映しているのかを検証する必要があるが、少なくとも「見返し」に相当する部位が明確に意識されていない事情を伺わせるものである。

あるいは、漢籍の「封面」として受け取られていた可能性もある。<sup>(11)</sup> この仮定に立てば、「封面」は「見返又は扉と同義の漢語」(長沢規矩也『図書学辞典』)であり、ヘボンの定義も誤りではない。また、「見返し」が前表紙に限定された事情も説明がつくわけである。いずれにしても、「見返し」という語のあいまいな印象は拭えず、古来より定着していたことに疑いを抱かせる。

やや時代は下るが、製本業界や図書館の用語集を見ると、'end paper(s)'に「端紙」の語が当てられている。小河次吉『英和図書及図書館語彙』(丙午出版社、1927年)は「端紙」に註して「書物の初と終わりにつく白紙、多くは裏打紙(end leaves)と同一の紙を用ひ一方は表紙裏に貼られてend leavesと称へ他の一方をend papersと云ふ。・・・我が国にてはこれを総称して見返し紙と称す」とし、庄司浅水他訳『最新製本術』(ブクドム社、昭和6年)も、「end-paper(見返し紙又は端紙)」のうち「表紙裏に貼るもの」を「end-leaf(端紙)」、「貼ってない方の紙」を「fly-leaf(遊紙、飛頁)」とする。

'end paper(s)'の訳語としては「端紙」が「見返し」よりはるかに素直である。洋式製本の導入初期には専ら文献に頼り、直訳の「端紙」が用いられていたのが、実作業の過程をより正確に反映する「見返し」が自然に用いられるようになり、職人用語として定着したものと思われる。

もう一点、和装本と洋装本の違いを見ておこう。

和装本には「背」がないということである。一枚の表紙(カバー)で本体を包み込む洋装本に対し、和装本は二枚の紙ではさむのだから、当然である。<sup>(12)</sup>

実態がないということは、その呼称も古来からのものか怪しまざるを得ない。方形の書物の各辺をさす語に古来「小口」がある。本文料紙の切り口に由来する語である。上小口(天小口)、下小口(地辺)、前小口(もっぱら洋装本に言う)と三方は定着した呼称を持つが、「のど」側の一方(洋装本の「背」)まで「小口」と呼ぶかは説が分かれる。長沢規矩也『図書学辞典』は「線装古書の背の方の切り口は小口とは呼ばず」とし、『広辞苑』は「袋綴じの和装本の天・背・地の総称」と寛容である。

洋装本のように縦に並べる書物であれば、背中に見立てる発想もしっくりくるが、平積みが普通である和装本に背中を見るのはいささか無理があると言う気がするが如何なものだろう。「背」もまた「見返し」に類する容疑を感じざるを得ないがひとまずおくとしよう。あえて仮説を急げば、「背」と言う呼称も古来のものと言うより洋装本の影響の産物であり、古来は『広辞苑』にみるように単に「小口」、天地、前小口と区別するときには、「のど側の小口」ぐらいに呼ばれていたのではないか。

問題は、洋装本が「背」を強調し、「背固め」という語があるほどに対し、和装本が開放的であるという事実である。考察し来たったように、この問題は表紙と'cover'の差異、書物におけるテキストの位置などに関わり、それぞれ文化的な意味作用<sup>(13)</sup>の追求を挑発する。いずれ稿を改めたい。

(11) 前掲(1)『書誌学談義江戸の版本』は、「唐本の『封面』は巻頭に一丁分まるまる使って、その丁表のみに印刷したものと、半丁だけを前表紙裏に貼りつけたものとの二類を総称するものである。それを和書の場合は二つに分けて、前者を『扉』、後者を『見返し』と呼ぶことになったと思えば良い。」としながら、続けて「但し、江戸期には両者を総称して『扉』と称していた形跡もある」と「見返し」の呼称の存否については慎重である。

(12) 「包背装」という一枚表紙で包む装丁もあるが、中世以前に稀に見える程度で、近世の和装本は二枚表紙の袋綴じが圧倒的である

# Japanese-style book and Western-style book

— about terminology of the parts in books

Osaka Shoin Women's University  
*Hiroshi* UTANO

## ABSTRACT

The term “mikaeshi” (end paper) has been used both for Japanese-style books and Western-style books. Viewing from the point of structure of books, only Western-style book needs it. It has no trace of being used before the period of mid-Meiji era when the technology of Western-style book-making was first introduced and established. Referring to the relevant literature, what the term “mikaeshi” had been adopted by Japanese-style books to align with the prosperity seen in Western-style book making of the time. By turning attention to its naming in the parts of books, and examining uniformity between naming and structure of books, the differences between Japanese-style books and Western-style books is clarified and its meaning from cultural point of view be examined.

**Key words:** bibliography, end paper, cover, spine, joints, groove, hinges, gutter

- 
- (13) 従来の書誌学が書物の即物的考証に自らを限定し、即物的考証から得られた知見の意味を問うことに禁欲的であったのは長い書誌学的伝統に忠実であったにすぎず、あえて難ずることもないが、ともすれば瑣末拘泥主義 (trivialism) に陥り、「玄人受けする 'dilettantism'」ともいうべきけれん味を芬芬とさせ、いたずらに他を遠ざけて、結果、学的閉鎖性をつのらせたことは否定できないと思われる。書誌学がテキストを扱う学問諸分野の基礎的な知識やスキルを提供する「手段の学」に止まり、それを徹底しようとするほど、こうした傾向に自らを閉ざすことになりかねない。仄聞する限り、現今の日本の書誌学は後継研究者や研究交流の場の乏しさからうかがって、危機的状況にある。

書物が文化の不可欠な道具である以上、書誌学的知見の意味を大胆に問いかけていく、いわば文化記号学的方向に転換していくことしか、書誌学の展望は開けないと思われる。たとえばロラン・バルトの文化記号論など、ひとつの方法論的示唆となろう。文化現象としての書物のトータルとその細部へのまなざしによって捉えられた個々の現象そのものの意味を執拗に追求する無理をあえておかすことにしか、危機への break-through は期待できない。筆者はこれを書物の文化意味論として組織してみたい誘惑を感じている。